

## 使徒の働き13章13-52節 「聖書に約束された福音」

### 1A マルコの離脱 13

### 2A 父祖たちへの約束 14-41

#### 1B 安息日の朗読 14-15

#### 2B 救い主イエスの到来 16-41

##### 1C イスラエルを選ばれた神 16-22

##### 2C ダビデの子孫 23-38

##### 1D バプテスマのヨハネの証言 23-25

##### 2D 無知ゆえの十字架刑 26-29

##### 3D 神によるイエスの復活 30-37

##### 4D 信仰による義認 38-41

### 3A 地方全体に広まる主のことば 42-52

#### 1B 人々の熱意 42-43

#### 2B 妬みにかられたユダヤ人 44-52

##### 1C 異邦人への宣教 44-49

##### 2C 迫害の中にある喜び 50-52

## 本文

使徒の働き 13 章を開いてください。今日は 13 節から見ていきます。パウロとバルナバが、アンティオキアの教会から、聖霊によって命じられて宣教の働きに召し出されます。彼らはまず、地中海に浮かぶキプロス島に航行しました。そこでユダヤ教の諸会堂で福音を宣べ伝えて巡回して、パポスまで行きました。地方総督セルギウス・パウルスに御言葉を伝え、彼は、偽預言者バルイエスが盲目にされたのを見て驚き、信仰に入りました。その後の話です。

### 1A マルコの離脱 13

<sup>13</sup> パウロの一行は、パポスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。

キプロスの対岸には、今のトルコがあります。トルコは当時アジアと呼ばれていました。私たちはアジアというとアジア大陸を思うので、「小アジア」と呼びます。小アジアの南部には、パウロの故郷タルソのあるキリキア州とパンフィリア州があります。パンフィリア州の首都が「ペルゲ」です。当時はとても栄えた町で、今もローマ時代の遺跡がくっきりと残っています。けれども、ここでキプロスの時のように、「13:5 ユダヤ教の諸会堂で神のことばを宣べ伝えた。」という記述はありません。となりますと、もしかしたらペルゲでは、みことばを語る事が困難であった状況だったかもしれま

せん。ここは土着の文化が強く、キリスト教が伝わるのは後世になってからのようで、パウロとバルナバをしても、困難だったと推察されます。

ペルゲは港町ではなく、ケストロス川というのが流れているのですが、12 ㎞ほど河口をさかのぼったところにあります。そして北には、トルコで有数の山脈地帯の一つ、タウロス山脈が横たわっています。北に山脈、南は地中海ですから、パンフィリア地方は雨が多く、マラリアなどの熱病も発生しやすいところでした。その北はガラテヤ地方になりますが、パウロは、ガラテヤ人への手紙でこう書いています。「ガラ 4:13-15 あなたがたが知っているとおりに、私が最初あなたがたに福音を伝えたのは、私の肉体が弱かったためでした。そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあつたのに、あなたがたは軽蔑したり嫌悪したりせず、かえって、私を神の御使いであるかのように、キリスト・イエスであるかのように、受け入れてくれました。それなのに、あなたがたの幸いは、今どこにあるのですか。私はあなたがたのために証しますが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出して私に与えようとさえたのです。」パウロはもしかしたら、ここでマラリアに罹り、目を悪くしたのかもしれませんが。コリント第二にある「肉体のとげ」はこのことかもしれないし、「6:11 ご覧なさい。こんなに大きな字で、私はあなたがたに自分の手で書いています。」と言って、自筆で書く時は大きな字になっています。

そして、彼らはピシディア州に向かう時に、タウロス山脈を通らねばならず、川岸を通るも、雨が降って川が氾濫しているなど、旅は困難を極めたことでしょう。また、盗賊がよく出て来るところです。パウロはコリント人への第二の手紙で、「何度も旅をし、川の難、盗賊の難(11:26)」と言及していますが、ここでそういう目に遭った可能性はあります。

そこで、「ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった」という言葉があるのが、なんとなく想像できます。キプロスで、偽預言者の妨げを目撃しました。そこには悪魔が働いていましたから、そういった霊的な衝撃があつたでしょう。そして、これから肉体的に、精神的にも困難が予想されます。パウロがもしかしたら、ここで熱病に罹っていたかもしれません。そういうのを見たマルコは、まだ若年で、経験が未熟だったのでしょか、ホームシックになってエルサレムに帰ってしまいました。これが後に尾を引きます。第二次宣教旅行に行く際に、バルナバはマルコを連れて行くと言って、パウロはこのことを理由に反対しました。激しい論争になり、それぞれ別行動をとることになります。

宣教の働きをしている者たちの中で、こういったことはとても現実的です。ある人が信仰が必ずしもそうした困難にまで追い付いていないであるとか、チームで働きをする時に課題になります。けれども、不完全ながらも神がその働きを前進させていく証しを、これからパウロの宣教旅行の中で見ていくことができます。

## 2A 父祖たちへの約束 14-41

### 1B 安息日の朗読 14-15

<sup>14</sup> 二人はペルゲから進んで、ピシディアのアンティオキアにやって来た。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。

ピシディア地方に入っています。そこに、シリアのアンティオキアと同名の町、アンティオキアがありました。ギリシア王、セレウコス・ニカトールが創建した町で、父の名に因んでそうつけています。父の名に因んで、ニカトールは複数の町に同じ名を付けたということです。ローマ時代は、ピシディアのアンティオキアは、ローマの植民都市になっていました。植民都市というのは、元軍人たちが入植をして都市づくりをしたところで、ある程度、自治が認められていました。ローマのモデル都市あるいは特別都市と言ったらよいでしょうか。ピリピやコリントも植民都市です。軍事や経済の中心的な役割を果たしました。私は、去年のトルコ旅行でこの町の遺跡に行く恵みにあずかりました。本当に大きく広いところであることが分かりました。人口は一万人はいたのではないかとされています。

そして、貿易に携わる商人の中に、ユダヤ人が多かったのです。それで大きいユダヤ人共同体があって、立派な会堂があったと思われます。ここの遺跡を訪れた時に、一行は、紀元四世紀の教会堂「偉大な教会」の跡があります。その教会堂の下には、当時のユダヤ教の会堂があると言われています。パウロが説教した会堂です。



<sup>15</sup> 律法と預言者たちの書の朗読があった後、会堂司たちは彼らのところに人を行かせて、こう言った。「兄弟たち。あなたがたに、この人たちのために何か奨励のことばがあれば、お話しください。」

ユダヤ教においては、世界中の会堂で同じ箇所を読むようになっています。律法と預言者たちの朗読をします。そこで、会堂の礼拝を司る会堂司がいますが、彼が、パウロとバルナバのところに近づきました。パウロは、ユダヤ教のラビですから、云わば免許があります。イエス様もそうでした、ユダヤ教のラビだったので、会堂で巻物が手渡され、イザヤ書を朗読し、そして「このことばが実現した」と宣言されました。パウロもユダヤ教のラビだったので、こうした機会を使って、主のことばを宣べ伝えていくのです。

「律法と預言者たち」とありますが、これで思い出すことはないでしょうか？ イエス様が言われました、「マタ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」復活された後に弟子たちに言われました。「ルカ 24:44 わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」これからパウロは、じっくりと腰を据えて、聖書から一切離れず、ねちねちといかに、イエスにあって律法と預言者が成就していったのかを論じていきます。

<sup>16</sup>そこでパウロが立ち上がり、手振りて静かにさせてから言った。「イスラエル人の皆さん、ならびに神を恐れる方々、聞いてください。

パウロは、イスラエルの人々に呼びかけています。自分も同じくイスラエル人ですが、「ならびに神を恐れる方々」とありますね。これが、異邦人のことです。改宗者あるいは、コルネリウスのように神を敬う人々です。彼らは云わば、私たちに分かり易く言えば、「求道者」でしょう。普通の異邦人であれば、ローマやギリシアの神々に仕えて、ユダヤ人の神には全く無関心です。けれども、異教の神々にある自己中心的な性格とは裏腹に、イスラエルの神は正義、公正、聖なる方であり、そういった優れたものに心が惹かれているのでしょう。ですから、聖書の知識がある程度あって、そしてなお神を求めている人々に語りかけています。

私たちは次回、14 章で、そうした聖書の知識がない異教徒の人たちにパウロがどう語るのかを見ます。そう考えますと、私たちの伝道方法も変わるのではないのでしょうか？ 私たちは、ロゴス・ミニストリーによって、すでに聖書に興味がある人がいらして、それで信仰を持つ方々がいます。初めから求道しているのです。けれどもそうではない方々には、土地を耕すというか、主イエスをなげ信じなければならぬのか、その背景を伝えていく必要があるでしょう。

## 2B 救い主イエスの到来 16-41

### 1C イスラエルを選ばれた神 16-22

<sup>17</sup>この民イスラエルの神は、私たちの父祖たちを選び、民がエジプトの地に滞在していた間にこれを強大にし、御腕を高く上げて、彼らをその地から導き出してくださいました。<sup>18</sup>そして約四十年の間、荒野で彼らを耐え忍ばれ、<sup>19</sup>カナンので七つの異邦の民を滅ぼした後、その地を彼らに相続財産として与えられました。

パウロは、イスラエルの民の歴史を、その民が選ばれ、神の民として生まれた歴史から始めています。つまり出エジプトから始め、四十年の荒野の旅、それから、約束の地に入り、相続地を得たというところまでです。ユダヤ人の祭りは、過越の祭りから始まり、仮庵の祭りで終わりますが、それが出エジプトから、無事に約束の地に入ったところまでを辿っていきます。

<sup>20</sup> 約四百五十年の間のことでした。その後、預言者サムエルの時まで、神はさばきつかさたちを与えられました。

出エジプトが紀元前 1446 年辺りと言われていて、40 年の荒野の期間があり、それから 450 年ですから、だいたい紀元前 1000 年までのことです。「さばきつかさたち」とは士師のことです。士師の時代がありました。預言者サムエルの時まで続きました。

<sup>21</sup> それから彼らが王を求めたので、神は彼らにベニヤミン族の人、キシユの子サウルを四十年間与えられました。<sup>22</sup> そしてサウルを退けた後、神は彼らのために王としてダビデを立て、彼について証して言われました。『わたしは、エッサイの子ダビデを見出した。彼はわたしの心になつた者で、わたしが望むことをすべて成し遂げる。』

士師の時代から、イスラエルに王国ができます。それは、彼らが神ご自身ではなく、周囲の国々のように人間の王が欲しいと願ったという失敗から始まっています。神がそれで、彼らの目にふさわしいサウルをお立てになりましたが、主の御声に聞き従わず、主に退けられました。そして神は、ダビデを選ばれたのです。それは、見た目ではなく、主は心を見るからでした。ダビデについて、「わたしの心になつた者」とのことです。

これは、ダビデが完璧な人間だったということではありません。ダビデについては、ウリヤの妻バテシェバと姦淫の罪を犯し、ウリヤを殺した罪が筆頭に上げられます。けれども、彼は主のみこころを求めました。友人の預言者ナタンに罪を指摘されたら、「主に対して罪を犯した」と告白しました。彼は過ちがないということではなく、過ちを犯したとしても、その場でへりくだり、悔い改めました。主の心をいつも求めていた人です。

## 2C ダビデの子孫 23-38

### 1D バプテスマのヨハネの証言 23-25

<sup>23</sup> 神は約束にしたがって、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主イエスを送ってくださいました。

ここから、パウロは一気に、イエス様を宣べ伝えます。ダビデに対して神が、その世継ぎの子がとこしえの御国を治めることを約束しておられたからです。午前礼拝で話した通りです。その他、イザヤ書には、こうあります。「イザ 9:6-7 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」「16:5 一つの王座が恵みによって堅く立てられる。ダビデ

の天幕で真実をもってそこに座するのは、さばきをし、公正を求め、速やかに義を行う者。」そして、ルカによる福音書で、ガブリエルが母になるマリアに対して、こう語りました。「1:32-33 その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

ですから、マタイによる福音書は、「ダビデの子、アブラハムの子孫、イエス・キリストの系図」という言葉で始まります。日本語訳は、「アブラハムの子孫、ダビデの子孫」となっていますが、語順に従えば、「ダビデの子、アブラハムの子孫」です。それで、ユダヤ人の中で「ダビデの子よ」とイエス様に助けを読んでいる場面が多く出てきますね。それは、この方がキリストではないか？と期待してそう呼んでいるのです。

<sup>24</sup> この方が来られる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に、悔い改めのバプテスマをあらかじめ宣べ伝えました。<sup>25</sup> ヨハネは、その生涯を終えようとしたとき、こう言いました。『あなたがたは、私をだれだと思っているのですか。私はその方ではありません。見なさい。その方は私の後から来られます。私には、その方の足の履き物のひもを解く値打ちもありません。』

ユダヤ人たちは、バプテスマのヨハネを、神から来た預言者であることを認めていました。福音書の著者はすべてが、彼の働きから始めてそしてイエス様の生涯を書き記しています。予め、道を整える者が出て来るという預言が、例えばイザヤ書 40 章にあるので、その成就がとても大事になるのです。そして、彼自身が自分は救い主ではないと否定して、後から来る方だと宣言しました。

## 2D. 無知ゆえの十字架刑 26-29

<sup>26</sup> アブラハムの子孫である兄弟たち、ならびに、あなたがたのうちの神を恐れる方々。この救いのことばは、私たちに送られたのです。

パウロは、熱く語りました。パウロ自身がパリサイ派であった人であり、父祖が求めていたこと、神の約束を熱烈に待ち望んでいました。それが、イエスにあって実現したのだと悟ったのです。だから、彼らの立場に自分を置いて、彼らに新しい異質な教えを押し付けるところか、彼らの待っている方が来られたという、良き知らせとして伝えているのです。

<sup>27</sup> エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者たちのことばを理解せず、イエスを罪に定めて、預言を成就させました。<sup>28</sup> そして、死に値する罪が何も見出せなかったのに、イエスを殺すことをピラトに求めたのです。<sup>29</sup> こうして、彼らはイエスについて書かれていることをすべて成し終えた後、イエスを木から降ろして、墓に納めました。

ここはピシディアのアンティオキアですから、エルサレムは遠い所です。遠いところで起こったことなので、知らない人たちはいたはずですが、そして、それがとても残念なことでした。それは、彼らの救い主を彼ら自身で罪に定め、死刑をピラトに求めたということです。

彼らの過ちを二つ挙げています。一つは、「このイエスを認めず」ということです。この方が行われている良いわざは、すべてが父なる神からの方であることを示していました。それはあまりにも明らかだったのに、認めませんでした。もう一つは、「安息日ごとに読まれる預言者たちのことばを理解せず」とのことです。預言者たちは、例えばベツレヘムでメシアが生まれることをミカは預言しましたが、理解しませんでした。目の見えない人を癒やし、足のきかない人を立たせ、それらはイザヤ書に、メシアが来られた時のしるしとして挙げられています。それらを認めませんでした。ガリラヤにメシアが来られることは、イザヤ 9 章に書かれていますが、ガリラヤについては何も書いていないと言ったりしています。安息日事に預言者が読まれているのに、理解しなかったのです。パウロがコリント人への手紙第二でこう述べています。「3:14-16 しかし、イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が朗読されるときには、同じ覆いが掛けられたままで、取りのけられていません。それはキリストによって取り除かれるものだからです。確かに今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心には覆いが掛かっています。しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。」

しかし、神のご計画は不思議です。そういった彼らの失敗も神には織り込み済みで、それを用いられて、全人類を救うご計画を立てておられたのです。「イエスを罪に定めて、預言を成就させました」とありますが、イザヤ書 53 章を読めば、それが生々しく預言されています。「53:8 虐げとさばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことか。彼が私の民の背きのゆえに打たれ、生ける者の地から絶たれたのだと。」詩篇 22 篇にも、ことごとく十字架に付けられたところの預言で満ちています。それから律法のいけにえの制度そのものが、キリストの犠牲を指し示しています。犠牲の血、いけにえが献げられることによって、罪が赦され、清められるのです。神の御子ご自身がその犠牲となってください、私たちの罪が完全に取り除かれるのです。詩篇の著者も、指導者たちの失敗がむしろ神の救いのご計画の要になったことを驚いています。「118:22-23 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。これは【主】がなされたこと。私たちの目には不思議なことだ。」

こうやって、何度も何度も、パウロは、預言がことごとくこの方にあって成就し、救い主イエスを罪に定めるということまでも、預言の中に書かれているのだと訴えているのです。けれども、パウロの説教の中心は次にあります。

### 3D 神によるイエスの復活 30-37

<sup>30</sup>しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせました。<sup>31</sup>イエスは、ご自分と一緒にガリラヤか

らエルサレムに上った人たちに、何日にもわたって現れました。その人たちが今、この民に対してイエスの証人となっています。

「使徒の働き」という映画がありまして、使徒の働きをすべてそのまま台本にして映画化したものがあるのですが、そこでパウロが説教している時に、29 節と 30 節には少し間がありました。「しかし」というところを強調して、パウロの顔の表情も変わりました。そう、ここが彼が良き知らせ、福音としていたのです。救い主は死んでいない、この方はよみがえられたのだ！と言っているのです。これが、使徒たちの宣べ伝えた福音の中心です。私たちの罪のためにキリストが死なれて、そして、聖書が言っているように、三日目によみがえられたのだ、ということです。第一コリント 15 章で、詳しく、イエス様がどのようにして弟子たちに現れたかについてパウロは説明していますが、何日にも渡って現れてくださいました。そしてその目撃者が、イスラエルの民に対してイエスの証人になっています。ペテロ、ヨハネなど、十二使徒もいますし、いろいろな働き人がすでに福音を伝えています。五旬節の時に、小アジアからもエルサレムにやって来て、ペテロの説教を聞いた人たちもいたことでしょう。

<sup>32</sup> 私たちもあなたがたに、神が父祖たちに約束された福音を宣べ伝えています。

この復活も、神が前もって父祖たちに約束されていた福音なのだ、とパウロは続けます。

<sup>33</sup> 神はイエスをよみがえらせ、彼らの子孫である私たちにその約束を成就してくださいました。詩篇の第二篇に、『あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ』と書かれているとおりです。

ここの二篇の箇所は、表面的に読むと、イエスが神から肉体的に生まれた子であるかのように見えます。しかし、パウロはこれを復活についての預言であるとしています。御子は、永遠の昔から神の御子であり、誕生する前とかいうのは存在しません。そもそも神に造られた被造物ではありません。永遠の昔から父と子の関係があったのです。ここでの、「わたしが今日、あなたを生んだ」というのは、この世界に対して、この方が神の御子であることが明らかにされたということです。パウロはローマ 1 章でこう言っています。「1:3b-4 御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」

<sup>34</sup> そして、神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちて滅びることがない方とされたことについては、こう言っておられました。『わたしはダビデへの確かで真実な約束を、あなたがたに与える。』<sup>35</sup> ですから、ほかの箇所でもこう言っておられます。『あなたは、あなたにある敬虔な者に 滅びをお見せになりません。』<sup>36</sup> ダビデは、彼の生きた時代に神のみこころに仕えた後、

死んで先祖たちの仲間に加えられ、朽ちて滅びることになりました。<sup>37</sup>しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちて滅びることがありませんでした。

ペテロのこのことを宣べ伝えました。34 節の預言は、イザヤ書 55 章 3 節にあって、35 節のは詩篇 16 篇 10 節にあります。いずれにしても、ダビデがいつまでも生きているかのように見えます。滅びることはないということなのです。けれども、エルサレムにはダビデの墓がありました。ペテロは、エルサレムに来ているユダヤ人たちに、あまりにも明らかな事実を示しました。ダビデはもう朽ちて滅んでいます。ということは、これはダビデ本人ではなく、ダビデに約束されたその子、であるということです。

パウロがここで強調しているのは、単に蘇生したのではないということです。イエス様は、甦りましたが、蘇生してまた朽ちていく肉体を持っていたのではないのです。朽ちない復活の体をもって甦り、それゆえ今も生きておられます。

#### 4D. 信仰による義認 38-41

<sup>38</sup> ですから、兄弟たち、あなたがたに知っていただきたい。このイエスを通して罪の赦しが宣べ伝えられているのです。また、モーセの律法を通しては義と認められることができなかつたすべてのことについて、<sup>39</sup> この方によって、信じる者はみな義と認められるのです。

パウロは、「兄弟たち」と、親愛の心で願い求めています。知ってほしいと願っています。それは、罪の赦しです。イエスを通しての赦しです。イエスが流された血によって、新しい契約が結ばれました。ここからパウロが他の使徒たち以上に、明確に語ったのが信仰による義認です。

新しい契約は、預言者エレミヤが語っていました。ヘブル書の著者が引用しているのでそちらのほうを引用します。「8:8-12 神は人々の欠けを責めて、こう言われました。「見よ、その時代が来る。——主のことば——そのとき、わたしはイスラエルの家、ユダの家との新しい契約を実現させる。9 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握ってエジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。彼らはわたしの契約にとどまらなかったの、わたしも彼らを顧みなかった。——主のことば——10 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである。——主のことば——わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。11 彼らはもはや、それぞれ仲間に、あるいはそれぞれ兄弟に、『主を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、小さい者から大きい者まで、わたしを知るようになるからだ。12 わたしが彼らの不義にあわれみをかけ、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。』」

ここを読めば、古い契約をイスラエルが破ってしまったことが分かります。それを、パウロは、「モ

一セの律法を通しては義と認められることができなかつたすべてのこと」と言っています。けれども、イエスの流された血によって、罪が赦されました。それが、エレミヤの預言では、「わたしが彼らの不義にあわれみをかけ、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」と約束されているのです。そして、このことが実現するのは、信じることによってなのだということです。義と認められることについては、ローマ書が詳しく説明していますが、ここでは神の前で全く罪を犯さなかつたようにみなされる、ということです。罪が赦されるだけでなく、正しい者としてみなされる、宣言されるということです。自分の行いではなく、キリストという神の賜物によって、この方の義が私たちに賜物として与えられる、ということです。その信仰による義については、ハバククによって預言されています。「正しい人は、その信仰によって生きる。(2:4b)」この方に信頼を寄せることによって、正しい人とみなされます。

<sup>40</sup> ですから、預言者たちの書に言われているようなことが起こらないように、気をつけなさい。<sup>41</sup> 『見よ、嘲る者たち。驚け。そして消え去れ。わたしが一つの事を あなたがたの時代に行くからだ。それは、だれかが告げても、あなたがたには信じがたいことである。』

ハバククは、1章5節で、上の言葉が神から与えられていました。信じがたいことだとして、バビロンが用いられて、ユダの悪が裁かれることを神は明かされます。同じように、今、ユダヤ人の指導者がイエスを罪に定めることによって、それがかえって神の救いの計画が成し遂げられ、さらに神がこの方をよみがえらせたということは、信じがたいことかもしれません。けれども、確かに神の約束として預言者たちに与えられていたのです。ですから、信じがたいこととせず、嘲ることなしに、受け入れなさいと警告しているのです。

### **3A 地方全体に広まる主のことば 42-52**

#### **1B 人々の熱意 42-43**

<sup>42</sup> 二人が会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。

<sup>43</sup> 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちがパウロとバルナバについて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みにとどまるように説得した。

人々の中で霊的な飢え渴きが出て来ました。次の安息日にも同じことを聞きたいと頼んでいるのです。そして集会が終わってから、人々が集まってきます。ユダヤ人も多く集まって来し、神を敬う改宗者、つまり異邦人たちも集まっています。イエスを救い主として信じたいと言っているのでしょう、それで、以前バルナバがシリアのアンティオケの新しい信者たちにしたように、留まるように説得しています。具体的には「神の恵みにとどまるように」説得しています。これまでパウロが語ったのは神の恵みですから、自分の律法の行いではなく、神の恵みによって救われるのですから、元に戻らないように説得したのです。

## 2B 妬みにかられたユダヤ人 44-52

### 1C 異邦人への宣教 44-49

<sup>44</sup> 次の安息日には、ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た。

これはすごいことです！遺跡を見渡しましたが、相当広い、大きな町でした。先ほど話したように、一万人はいたのではないかとされています。ですから、数千人がやってきました！町全体が揺れ動いたと言っても過言ではないでしょう。その教会堂の跡、下に会堂があるのではないかとされている所ですが、そこに数千人が入るのは不可能です。円形劇場もありましたが、そっちに動いたのでしょうか？あふれ出していたのかもしれませんが。

ここで、「主のことばを聞くために」とありますね。何か大きな奇跡が起こっているからではなく、主のみことばを聞くためです。神の約束のことばが、今実現しているのだという話をパウロはしていました。神の言葉の通りに実現していきます。このことが彼らを引き付けたに違いありません。

<sup>45</sup> しかし、この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロが語ることに反対し、口汚くののした。

キリスト者にありがちなのが、何か自分に嫌なことをしてくると、それで「迫害だ」ということです。けれども、迫害が起こるのは、それだけ証しが立てられているからなのです。妬みが起こるので、それだけの主のみわざが起こっているからであり、それで迫害をします。イエス様は、「マタ 5:10 義のために迫害される者は幸いです。」と言われました。自分の行っている義が、世の光として人々を照らしているならば、迫害を受けます。

<sup>46</sup> そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければなりません。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。<sup>47</sup> 主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』」

「大胆に語った」と言っています。そうです、これは大胆です。主のことばは、ユダヤ人に対するものであり、救いはイスラエルに対するものであったはずですが、ところが、今、異邦人の方に向かいますと宣言したのです。それが、ユダヤ人である彼らが拒んだので、それで神のことばが、異邦人に語られるようになります。これは、イエス様も語られていたことでした。「マタ 21:43 ですから、わたしは言っておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。」しかし、これも神のご計画の中に入っていました。神は、イスラエルだけでなく、異邦人にも救いを与えようと考えておられました。パウロが徹頭徹尾、預言書に基づいて語っていることに注目

してください。イザヤが既に、異邦人への救いを預言していたのです。

これから、パウロたちの宣教は、妬みにかられたユダヤ人の反対を受けて、それでその町を出て行きますが、異邦人の改宗者や神を敬う人々が信仰を持って行き、そして他の町でもユダヤ人の会堂で語り、同じことが起こります。そうやって彼らは宣教の旅をしていき、福音が広がっていくのです。ユダヤ人の妬みがかえって異邦人の救いへとつながっているのです。この逆説的なことをパウロは、ローマ 11 章で述べています。「11:11 それでは尋ねますが、彼らがつまずいたのは倒れるためでしょうか。決してそんなことはありません。かえって、彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせました。」

けれども、彼らの責任は免れません。「自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしていませう」と言っています。永遠の滅びとは、主のことばを自ら拒んで、自らその道を歩まなければ滅びることはできません。神は救いたいと願われているからです。他の誰のせいにもできません、自身の選択と責任なのです。

<sup>48</sup> 異邦人たちはこれを聞いて喜び、主のことばを賛美した。そして、永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った。

イザヤ書に書かれてある異邦人の救いの言葉を聞いて、異邦人は喜びました。そして、興味深いことに、主を賛美したのではなく、「主のことばを賛美した」とあります。主のみことばのすばらしさを賛美したのです。午前礼拝で見たとおり、主のことばの真実さは、天地を超えています。ダビデは、このように賛美しています。「詩篇 138:2 あなたがご自分のすべての御名のゆえに、あなたのみことばを高く上げられたからです。」

そして興味深い表現をルカは書いています。「永遠のいのちにあずかるように定められていた人たち」と言っていますね。永遠のいのちが、初めから定められていることを示唆する言葉が、聖書の他にもあります。例えば黙示録 13 章 8 節、「地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。」それもそのはずです、永遠の神が私たちが愛しておられるのですから、永遠の愛をもって私たちが愛し、全く世界が始まる前から私たちを選ばれたのです。途中で、「あっ、そうだ。清正をわたしは造るんだったな。彼をキリスト者にしよう。」などとしなかったのです。初めから知っておられ、初めから計画をして、初めから決めてくださったのです。エペソ 1 章でパウロはこう言っています。「1:4-5 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあつて私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとしたのです。神は、みこころの良しとするところにしがたって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。」

<sup>49</sup> こうして主のことばは、この地方全体に広まった。

使徒の働きでは、「主のことばは、広まった」という言葉が何度も出てきます。何を聞きに来たかという、主のみことばであり、広まるのは主のことばです。そこには奇跡も伴うことも多くありますが、あくまでもみことばの確かさが明らかにされているので、人々は主のことばを受け入れていったのです。マルコの福音書の最後は、「16:20 主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしをもつて、確かなものとされた。」とあります。

そして、ピシディア地方全体に広がりました。

### 2C 迫害の中にある喜び 50-52

<sup>50</sup> ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町のおもだった人たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出した。<sup>51</sup> 二人は彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオンに行った。

「神を敬う貴婦人たち」とは、ギリシア、ローマ文化にある異教的な慣わしや、男尊女卑の文化に嫌気がさし、女たちの尊厳が認められているユダヤ人の宗教にひかれている人々のことを指しています。高い地位についている婦人たちがそれです。当時の文化では、男は愛人がいて、娼婦がいて、それから嫡子のための正妻がいるのが当たり前でした。そういった貴婦人や高い地位にいる人々を扇動して、それでパウロとバルナバを迫害させました。

彼らは追い出されましたが、その時に「足のちりを払い落とし」とあります。これは主が弟子たちに宣教について教えておられたことです。「マル 6:11 あなたがたを受け入れず、あなたがたの言うことを聞かない場所があったなら、そこから出て行くときに、彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい。」主のことばを語らなければ、災いは自分に下りますが、その責任は果たし、災いはあなたがたに下ると言うことを示すジェスチャーです。福音宣教というのは、こういう性質を持っています。語るどころまでが、私たちの責務です。命じられていることです。けれども、語れば、それを聞く人々に責任があります。

そして彼らは、イコニオンに向かいます。次週、14 章ではイコニオン、リステラとテルベという、南西にある町々にパウロとバルナバが行くところを見ていきます。

<sup>52</sup> 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

二人には迫害がありましたが、そのような敵対的な雰囲気のある中で、信じた人々がキリストの教えに従っていったのです。そして彼らには喜びがありました。そして聖霊に満たされています。な

んとすばらしいでしょうか。迫害があっても、喜びなさい、大いに喜びなさいと主は弟子たちに言われました。私たちに与えられている良い知らせ、主のことばは、人々を喜びに満たします。神が、そしてイエス様がそのように意図されているからです。「ヨハ 15:11 わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。」この喜びは、環境に左右されません。状況に左右されません。神との関係にある喜びだからです。どんな困難があっても、喜んでいられるのです。